

ピサからベニス 駅前旅館シリーズ (完)

合間を見て、ガイドブックを片手に、ホテル近くのバス停からバスに乗ってベニスに出かけた。英語でベニス、イタリア語でヴェネチア。地中海貿易で巨万の富を蓄えたものの大航海時代への移り変わりとともに衰退の道を歩んだアドリア海北岸の島に立地する港湾都市。今は「地中海の女王」とか「水の都」と呼ばれる往時おうじを偲しのばせる屈指の観光都市。「ゴンドラ」、「ヴェネチア・グラス」、歌「サンタ・ルチア」それとシェークスピアの「ベニスの商人」——ベニスと言われても、僕には、このぐらいしか浮かんではこない。



ベニスは島の集まりだった。一八四六年完成の四キロの鉄道橋、一九三二年開通の、それに沿った自動車橋道路。このいずれかを經由しない限り陸路ではベニスには行けない。鉄道の終着駅の「サンタ・ルチア」と自動車ターミナルのある「ローマ広場」が町の玄関だ。それから先の交通手段は、狭い運河をぬって進む昔ながらのゴンドラか、島々を結ぶ「水上バス」しかない。基本的には、橋の架かっている離れた島に行く以外は、歩くしかない。

バスの終点は「ローマ広場」。なぜベニスに「ローマ広場」があるのか分からないけれど、そこに着いてからが大変だった。本島の中央を貫くS字型の大運河のほか、約二〇〇近い運河が縦横に走り、そこに約四〇〇の橋がかかっている。道は迷路のように入り組んでいる。

こんなところだから大変だ。こちらの方向に行けば目的地に着くだろうなどと歩いたら、間違いなく、とんでもない目に遭う。橋がないため行き止まり。戻るしかなく、ぐるぐる歩き回される。



地元の人たちは橋の位置と道の関係を熟知しているから平気なのだろう。だが、いつも適当に歩いている僕はすっかり戸惑った。得意の方向感覚など、このベニスではまったく役に立たたなかった。ガイドブックを片手にへろへろになり、同じ場所をウロウロする羽目に陥った。「穴場」などを探すことは諦めた。ともかく有名な「サン・マルコ広場」を基点に動くことにした。

ほとんどの観光客が同じようだった。リュックサックとスニーカーの定番スタイルの顔を覚えてしまった欧米人に、あちこちで何回も出会った。彼らも、苦笑というか弱ったというか、恥ずかしいというのか、そんな表情をしていた。それが救いだった。僕だけはない。みんなが戸惑っている——その様子を見て恨みがましい気持ちで和らいだ。

お定まりの観光コース

ところで、このような場所に都市が建設されたのは、五〜七世紀にイタリア北部に侵入し、当時のヨーロッパ大陸に住んでいた人たちを恐怖のどん底に落とし入れたフン族などの異民族の侵攻から逃れ、葦あしだけが一面に茂っている「干潟」に新天地を求めて人々が移住したことが、きっかけだったという。塩や魚などの交易で繁栄し、それが独立性を高め、その連合体の中心地、「都市国家」の中心地として発達した。初めは陸地に近い干潟に居たが、防衛上の見地から干潟の中心、現在の場所に移ったのだという。

「都市国家」というけれど、日本で言えば「堺」のようなところだったのだろう。イスラム圏との交易を含め地中海での広範な貿易特権も得る。そして十字軍の遠征が行われるようになると、その出発地、根拠地になると同時に、地中海貿易に関する特権も得る。それで得た富と発言力を背景に、十三〜十六世紀の間、国際政治の場でも重要な役割を持つことになった。

しかし、その地位もイギリスなど北西ヨーロッパ諸国が地中海貿易に進出したため、十七世紀には没落し、十八世紀になると、ただ自由かつ洗練された歓楽的な雰囲気の名高い小国になってしまったという。その息の根を止めたのはナポレオンだった。一七九七年、イタリアに侵入したナポレオンは、ベニスを占領し、長く続いてきた共和制を廃止、ベニスをおーストリアに移譲した。その後、様々な政治的な駆け引きなどに翻弄ほんろうされることになるけれど、二度とかつての独立した「ベネチア共和国」のような地位を復権することは出来なかった。

そんなことを思い出しながらも今回はお上りさんに徹することにしようと思った。長さ約十メートル、幅は約一・五メートルという「ゴンドラ」に乗ること、有名な「ベネチア・グラス」を買い求めること、それとガイドブックに書かれていたビザンティン・ロマネスク様式の「サン・マルコ大聖堂」や、かつてベネチア共和国政

庁であった「ドゥカーレ宮殿」などの歴史的建築物、それと多くの著名な絵画が所蔵されているという「アカデミア美術館」に行くこと、それだけを心掛けることにした。



「ゴンドラ」には、特別な思いを持つていた。映画やテレビの旅行番組で見ていると、別世界に引き込まれるようだった。しかし、自分が実際に乗ってみて、間もなく、期待は無惨にうち砕かれた。

見栄えのする場所は極めて限られていた。お世辞にも水は綺麗とは言えないし、あちこちの建物から下水がチョロチョロと流れ込んでいる。水際の建物の多くは浸水に悩まされている。くさい臭いを我慢しながら、そんな状況を見ていると、ロマンチックになれと言われても難しかった。

救いと言えば、たまたま乗ったゴンドラの船頭が、船頭仲間のボスらしく、エンタテイメント精神に富んでいたことだった。滅茶苦茶な英語だけれど、それで何か楽しませようとする。それに、つつい引き込まれた。狭い見通しの悪い曲がり角になると、衝突を避けるため、自動車の「警笛」の代わりに大声で、合図を送り合うのが約束らしい。彼の「オーエー」と歌うように送る合図は、素晴らしい声と声量で、明らかに群を抜いていた。それを聞いているだけで映画の主人公のような気分させてくれた。

時折、すれ違う、ワイングラスを片手に、いかにも気のよい、世界の田舎者のアメリカ人の底抜けの明るさも救いだだった。そんな一行に出会おうと、こちらでも英語が



下手なことなど忘れて、訳の分からないことを叫び、「チャオ！」とやりあって手を振って別れる。わずかな距離の遊覧コースだったけれど、ぼられたという気分にはならなかった。すべてを承知の上で、また乗っても良いと思った。さすがに観光で飯を食っている人たちである。



サン・マルコ広場というのは、サン・マルコ寺院を中心に、宮殿とか博物館によって三方が囲まれ、もう一方は海に面している長方形の広場だ。広場はカフェと餌をついばむ無数の鳩で埋まっていた。それを見たら、何も建物の中に入ることない。カフェでエスプレッソでも飲みながら、人間ウォッチングと、青空の下での日光浴を楽しむだけで十分だと思った。



でも、結局、いくつかの建物に、行列待ちして入る羽目になった。もちろん入って見れば、決して悪くはない。しかし、いくら芸術だと言われても、それらが作成された背景、それらによつて、どれだけ多くの人たちが救われたというか欺あざむかれたというか——そんな人間の怨念おんねんのようなものが漂っていて、やや辛くなった。フィレンツェとは、どこか違う雰囲気雰囲気が充満していた。

「芸術の機能」——芸術の役割は時代によつても、それを支援する人間の意図によつても大きく左右される。旧石器時代の洞窟に描かれた狩猟の絵などは、近代

の写実的な絵画と比べても本質的な差異はないけれど、それはあくまでも収穫を願う呪術的なものだった。その点ではほとんどの宗教芸術は同じだ。二十世紀の社会主義国ばかりか、戦前の日本でも、社会体制を支えることが、芸術の一つの大きな目的というか正しいあり方だった——こんな説明が「美学」の専門書には書かれていた。

そんなことを思い出し、それが頭にこびり付いてしまった。そのため、いくら著名な目にしても「美術鑑賞」の対象として素直に眺める気分にはなれなかった。十字軍によって、「神に感謝しつつ」、どれだけ多くの人たちの血が流されたことか。どれだけの略奪と強姦が繰り返されたことか。救いを求める多くの貧しい人たちの寄付で、どれだけ司教たちが私腹を肥やしたことか。それがこの結果か……そんな思いが頭から離れず、気分も悪くなった。教団など組織の一員にならないならなければならぬことを前提とする「宗教」には嫌悪感を覚える僕にすれば、我慢ならなかった。「純粹」に眺めれば、玉石混淆ぎよくせうなのに、ただひたすら「感動」している人たちと一緒に居ることが辛くなった。

ペストとカーニバル

こんなことを思うのは、十字軍の根拠地として繁栄した都市だといったことが頭にこびり付いていたからばかりではない。「ゴンドラ」で下水の流れ込む狭い運河を通った上に、街のあちこちに気味悪い「仮面」の店があり、所狭ところせましに様々な「仮面」が並べられているのを眺めたからだ。



「仮面」を見て、中世のベニスについて考え込んでしまった。東西貿易の中継地であったベニスでは、十年に一度ぐらいの割合でペストの流行に悩まされた。ペストはもともとネズミ類の流行病で、貿易船とネズミとは切っても切れない関係にあ

つたことが災わざわいしたらしい。十四世紀に中央アジアに発生したペストが、ヨーロッパ全域を席巻せっけんし、「黒死病」（死亡者の皮膚が黒ずんでみえたことからの俗称）として怖れられたことは有名だ。その時、当時のベニスの全人口の約半分が死亡したという。

だいたい中世のヨーロッパは汚きたかった。「中世は『入浴しなかった千年』とも呼ばれる。裸は罪との教会の指令によるものである。上下水道やゴミ処理が進んでいない中世の都市や宮殿は悪臭が漂い、貴族や王族は香水が必須だった。イギリスではじめて石鹼が作られたが一六四一年。すでに宗教的制約は緩んでいたが、課税が重く、産業的な発展は遅かった」（「アシモフの雑学コレクション」新潮文庫）というのだから、ペストが大流行したのもやむを得まい。ちなみに「日本大百科全書」（小学館）では、ペストについて、概略、次のように書かれていた。

ペスト菌の感染によっておこる急性伝染病。ペストの流行はすでに二、三世紀ごろからあったと伝えられているが、一四世紀に中央アジアからヨーロッパ全域を席巻せっけんした大流行は有名で、当時のヨーロッパ全人口の四分の一にあたる二五〇〇万人の死者が出て、「黒死病」として恐れられた。

ペストは元来ネズミなど齧歯類げっしの流行病であり、これがノミ、ナンキンムシ、シラミなどの昆虫の媒介によってヒトに感染する。リンパ節腫、ペスト敗血症および肺炎などを

引き起こす。ペスト患者の大部分の病型は腺ペストで、皮膚や粘膜から侵入したペスト菌が、近くのリンパ節で増殖し、これが出発点となつて他のリンパ節にも広がっていく。

大多数は飛沫感染によつてペスト菌を直接吸入して発病する。肺ペストとペスト敗血症では、ともに二、三日の経過で死亡する。腺ペストは、経過が一週間以上にわたる場合は治癒することもあるが、致死率は三十〜九十％である。治療には、抗生物質剤およびサルファ剤が用いられる。

実は、このペストと「仮面かめん」、それと有名なベニスのカーニバルとは密接な関係がある。ベニスの「仮面かめん」として有名な長い嘴くちばしを持ったものは、ペストが流行した当時、医者が感染しないようにマスクとして利用したもの——長い嘴くちばしのような部分



に布とニンニクを詰めたものをかぶり、手に長い杖を持ち、患者に近寄らないようにして診察して回ったという——をモチーフにしたものだという。

また、カーニバルというのは、謝肉祭しやにくさいと訳されているけれど、その生い立ちとか狙いは、キリスト教とは関係のないもののようなのだ。「日本大百科全書」(小学館)には、概略、以下のように説明されていた。

キリスト教国のうち、主としてローマ・カトリックの国々で行われる祭り。毎年、復活祭(イースター)の四十日前から始まる四旬節の期間中は、キリストの断食をしのいで肉食を絶つ習慣があるが、その前に肉を食べて楽しく遊ぶ行事。

キリスト教倫理による束縛の枠外にある様々なものを取り込み、日常の社会規範や秩序を一時的に転倒させ、それが終わった後、再び元の秩序に活性化された状態で戻す狙いがあつた。

その起源はローマ時代の豊作を祈る農耕祭あるいは農神祭と呼ばれる祭り。キリスト教の初期に、この新宗教に加入したローマ人

日常の社会規範や秩序を一時的に転倒させる……そのために「仮面」が役に立つと言うわけだ。「仮面」を付け、仮装かそうしていれば、馬鹿なことをやっても誰がやっているのか分からない。安心して無礼講ぶれいこうを楽しめる。

それだけでなく、中世のベニスは今から見ても相当に乱れた社会だったようだ。何と十六世紀半ばで人口十万人に対して一万人を超える娼婦しょうふが居たという。ピンからキリまでの娼婦しょうふがいた。高級娼婦ともなると、ファッションや教養的にも時代の最先端に行く女性で、貴族の女性たちの「憧れの的あこが」だったともいう。

夜も昼もギャンブルで明け暮れ、ルーレットで身ぐるみはがされ、裸で修道院に帰った神父がいたとか、貴婦人は愛人を兼ねた召使いを持たないと恥とされたとかいった類の話も数多く伝わっている。

ちなみに、君主、貴族から、文人、自然科学者、画家、役者、ペテン師、そして貴婦人から下女、娼婦しょうふに至るまであらゆる類の人間と係わり、抜け目のない才覚と、遠慮を知らぬモラル、深くはないが広い教養を武器に、自由奔放な生涯を送った、そしてエロチックな情事の記録が全編にあふれる「回想録」を書いた、プレイボーイとして名高いカサノバ（一七二五～一七九八年）が生まれたのもベニスだった。

「最後の晚餐」

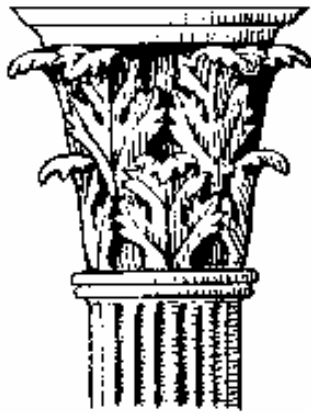
ベニスの迷路のような細い路地を歩いていると、こんなことが次から次へと浮かんでくる。だからサン・ジョルジョ島に行こうと決めた時には、晴れ晴れとした気分に戻った。サン・マルコ広場の沖合にある島で、「ゴンドラ」では行けない。「水上バス」を利用しなければならぬ。ところが、これが「都バス」と同じで、どれに乗れば良いかなかなか分からない。ガイドブックの説明はほとんど役立たない。季節によっても違うし、時間帯によっても違う。どの「水上バス」に乗れば良いのか、案内板を見たり、「バス停」に聞きに行ったりしていたら、人なつっこそうなイタリア人が寄ってきた。



胸には鑑札をぶら下げている。話を聞けば「ベネチア・グラス」の工場の無料見学ツアーの誘いだ。セリフがふるつている。悪いヤツが多い。でも自分は、ちゃんとした資格を持っていると鑑札を指で指す。そして日本語のパンフレットを取りだしながら、片言の日本語混じりで、怪しい無資格者の連中のやっているものに比べれば、いかに素晴らしく、いかに妥当な値段であるかを強調する。

ちよつと心を動かされたけれど、話の辻褄つじつまが合わない。で、冷やかし半分で、それも楽しみながら話だけは聞いた上で、丁寧に時間がないので行けないと断った。良いカモだと思つたのだろう。そして、ヤツタとでも思つていたのでだろう。ところが、最後になつてどんでん返しである。急に不機嫌になつた。

僕とすれば逆で、楽しませてもらったという気持ちが強かつた。で、まったく無邪気そうに「サンキュー」「チャオ」と思いつきりにこやかな顔で言い、手を振つて、当惑した表情の彼を後にした。暫しばらく歩いてから振り返つたら、彼は、また別の日本人らしい観光客をつかまえて、笑顔を振りまきながら身振り手振りを交えて口説くどいていた。

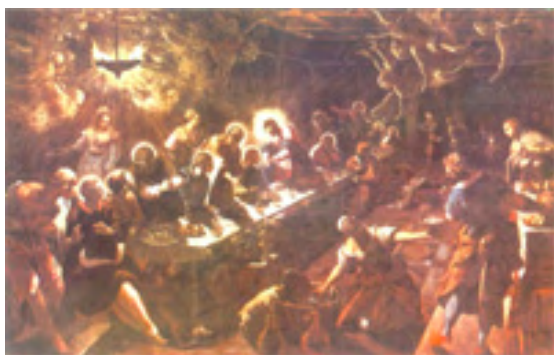


サン・ジョリユジュ島には高い鐘楼しょうろうを持つた教会がある。一六一〇年完成。コリント式（古代ギリシヤの都市、コリントから起つたもの。ローマ・ルネサンス以降の建築にも用いられる。葉を飾つた華麗な柱頭に特色）の巨大な円柱がベースになっている。この教会に「最後の晚餐」の絵がある。そんなことを聞かされた。名前だけは知つている「コリント式」の円柱の実物を見ることも、そして何よりも「最後の晚餐」の絵が見られるという話には心が動かされた。「ベニスにあつたのかなあ？」——やや腑ふに落ちなかつたけれど、「水上バス」に乗るのも悪くないと思つて向かつた。

心地よい潮風を浴びながら「水上バス」から眺めるベニスの風景は、また格別だつた。「ゴンドラ」で味わつたベニスの恥部は見えない。ただただ、海面に浮かぶ幻想的な都市の風情だ。観光客でごつた返している「水上バス」の中だけれど、最高にハッピーな気分になつた。もつと乗つていたいと思つている間に島に着いて、下ろされた。



次の便が来るまで、一時間以上の余裕がある。ユラユラと揺れる「水上バス」から、船員の手を借りて島の波止場に降りた。立派な教会があるだけで、他に何も無いようなところだった。「最後の晩餐」を見てみたかったので建物に急いだ。内部に入ると荘厳な雰囲気、うろろうするも気が引けて、さりげない様子を装い、目指す「最後の晩餐」を探した。だが、記憶にあった、NHKのテレビ番組で観た「壁画」の修復風景の映像にながるようなものは一切なかった。



人が数人、群がっていた。その前に絵画が飾られていた。それはベニス生まれで、ほぼ一生をベニスで過ごしたという画家・ティントレット（二五二八〜九四年）の「最後の晩餐」だった。逆光線による強烈な明暗の対比や、ミケランジェロに傾倒し、動的かつドラマティックな表現を生み出したという事で知られる画家だ。その最後の作品が、ここサン・ジョルジュ・マツジョーレ聖堂の「最後の晩餐」の「絵」ということだった。

「最後の晩餐」——キリストが捕らえられ、十字架につけられる前日、十二人の使徒と夕食をともにし、ユダの裏切りを皆に告げ、またパンとぶどう酒を祝し、「取って食べなさい。これはわたしの体である」「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪がゆるされるように、多くの人のために流すわたしの血、契約の血だからである」などと語ったとされる話で、多くの絵画などの題材にされたといったことは知っていた。



しかし、「最後の晩餐」Ⅱ「レオナルド・ダ・ビンチ」というステレオタイプの思考に完全に嵌^{はま}っていた。レオナルド・ダ・ビンチの「壁画」を観ることができる、そのことについて微塵^{みじん}も疑^うてはいなかった。それだけに驚きというか落胆は大きかった。「壁画」と「絵画」との違いなどというものではない。両者を比較すれば、一目瞭然^{りゃくぜん}だろう。

同じ大きさの画面にして比較すると、構図などの点でティントレットに軍配を上げたい。これが、今の感覚からすれば普通だと思う。レオナルド・ダ・ビンチ（一四五二〜一五一九年）やミケランジェロ（一四七五〜一五六四年）などの作品を乗り越えるべく努力した成果^{たまもの}の賜^{たまもの}。だと言ってしまうえばそれまでなのだけれど……。

しかし、迫力という点では必ずしもそうではないのかもしれない。実物は見たことないけれど、やはり巨大な「壁画」は圧巻なのかもしれない。そう思うと、目の前のティントレットの「絵」が哀想に思えた。大きさはかりではない。祭壇の横の壁に掛けられており、祭壇のきらびやかな装飾に押され気味というか、その対比が異質で、「絵」がだいなしだった。一枚だけを持ち出し、別の環境で観賞すれば、もつと素晴らしいに違いないと思った。

いずれにしても僕の完全に一人合点^{ひとりがつてん}、勘違いだった。レオナルド・ダ・ビンチ（一四五二〜一五一九年）は、フィレンツェ近郊に生まれ、フィレンツェとミラノを中心に活動し、有名な壁画もミラノの修道院の食堂の壁画であるという話を思いだした。

本当の晩餐

食堂と言えばレストラン。そう、イタリアに来て以来、一度ぐらいは、いわゆる一流のレストランで食事をしたと思いつけてきた。ピサでもフィレンツェでも、

この願いは果たせなかった。それだけにベニスでは心に期するものがあつた。それでガイドブックに載っていた一番の高級店に予約を試みた。(要予約)とあつたので、ホテルで頼んでもらつた。そうしたら案の定というべきか、満席で断られた。二番目の「季節で作る伝統の味——近海で採れる魚、野生のアスパラガスなど、季節の地の素材のみで作る、伝統的なベネチア料理が食べられる」と紹介されていた店は、どうも廃業したらしかった。電話は繋がらないし、電話帳で店の名前を調べてもなかった。「海の幸いっぱいの人気店」というのも連絡がつかなかった。何と(要予約)とある三店のうち二店までがなくなっているようだった。あとは(要予約)とはない。

それでも諦められないので住所を頼りに探した。そうしたら一つは行方不明、もう一つは、やっぱり店は潰れていた。これがJTBの、しかも数ヶ月前に出されたばかりのガイドブックの内容で、ベニスの入り組んだ細い路地をウロウロさせられているうちに本当に腹が立った。これまでガイドブックなどに頼ってきたことがなかっただけに、今回は、その姿勢を貫き通さなかつた自分に腹が立った。



ガイドブックに出ている、しかも期待が持てそうなレストランは、あと一軒しかなかった。残りには、行つてみたらいずれもカフェに毛の生えたような店ばかりだった。必死で地図を頼りに、聞き回りながら探した。ようやく見つけた時には、もう六時を回っていたところにあるのだから、分かりにくいことこの上ない。近くにきているのに、目に付かず、何度も何度も周りをウロウロして、ようやく見付けた。

七時開店とガイドブックにはあつたけれど、もう信用しない。人影が見えたので、ドアをノックし、顔を見せた店の人に、今日、食事をしたいのだが……と聞いた。今度は正しかった。分かりました、もう少しで開けるから待つて欲しいという。その返事を聞いた途端に、ドツと疲れが全身から吹き出した。そして「やつとイタメシにありつける！」と思った。

「市場に立つ美味なる店——昔、郵便局として使用されていたという十六世紀の歴史ある建物を利用。魚市場のすぐ隣というロケーションからも分かるとおり、自慢は新鮮な魚介類を使った料理。味と古き良き時代の雰囲気の両方が楽しめる店だ」

ガイドブックにはこう書かれていた。一八〇〇年の創業だとも書かれていた。これなら期待できると、心豊かな気分になり、一服しながら開店を待った。一番乗りだった。店の中の雰囲気も悪くはない。だんだん期待が高まった。案内されたテーブルは窓際まじぎわとは反対の場所だったので、窓際の席まじぎわが良いと言ったら、そこは予約が入っている、ここしかないとおつきらぼうにいう。ちよつとムツとしたけれど、飛び込みで、たしかに予約を入れていなかったのだから仕方がない、まあ、そう悪そうではないし……と引き下がった。何はともあれ、腹も減っていて、早く真つ当な食事でありつきたかった。

待望のメニューが渡された。渡されて驚いた。日本語だった。さらに内容にも驚いた。代わり映えのしないものばかりだ。英語のメニューを欲しいと言ったら、内容は同じだという。帰る時、店はかなり客で埋まっていた。その皿を横目で見ながら店を後にしたのだけれど、たしかに同じような料理を食べていた。とくに変わった料理は見られなかった。味も普通だった。

だいたいガイドブックとかパンフレットとかに頼るとろくなことはない。ベニスの駅前旅館もその一つだ。

「全七十室。全室にトイレ浴槽、カラーテレビ、直通電話およびエアコン完備。ガーデンバーと近代的なアメリカンバーで世界の飲み物。伝統的なイタリア料理……」 「ベニスの歴史的な中心部から五分の静かで心地よい場所に立地。全面改装。大きな無料駐車場が完備。ベニスにもすぐ。数メートル離れたところからは十分おきにベニス行きバスが出ている」

写真も悪くはない。しかし、現実とまったく違う。何が全面改装だ。いったい、いつのことなのだ。何が大きな無料駐車場だ。あの廃置き場が駐車場だというのか。どこにバーがあるんだ……。中華料理の方が遙かにまして、何が伝統的なイタリア料理だ。伝統的なイタリア料理というのはコーヒーと菓子パンのことか。言いかせば切りがなかった。ピサのホテルも実は似たり寄ったりだった。大きいな違いは、中華料理があるかないかぐらいだった。



振り返ると、こと食事に関する限り、ピサの駅前旅館で最初に紹介してもらった地元の人向けのレストランがコスト・パフォーマンスの点でも味の点でも最高だったかもしれない。山盛りのチーズたっぷりのサラダとパスタ。それと旨いハウスワイン。明らかに大食漢のMさん、チーズに目がなく、食欲が落ちないOさん、それと痩せの大食いのYさんなど、皆が腹一杯食べて飲んで平和になるのに一万円ちよつとしか、かからなかった。

二〇〇一年春 伴 友貴